
君の手

印殷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の手

【Nコード】

N8551C

【作者名】

印殷

【あらすじ】

自分のことを相手が好きなんだと気がついていない女の子が、ある日から相手の気持ちを垣間見るようになって……。

第1話毎朝

すがすがしく晴れた9月の空。吸い込まれてしまいそうな蒼い空。左右を同じ学校の生徒が走っていく。・・・どうして急ぐんだろう。まだ間に合うのに・・・

上を向きながら歩いていく中二の少女。曾根幸（そねさち）毎日、遅刻ぎりぎりの常連である。今日も気持ちよく学校に向かって歩いていく。

「そろそろかな・・・」

バンッと心地よい刺激が背中を駆け抜ける。・・・来た・・・

・・・

「お前、またここ歩いてんのかよ。また遅刻するぞ？」

後ろから幸の背中を叩いた同じクラスの少年。朝河智紀（あさかわ ともり）。毎朝、遅刻ぎりぎりの幸の後からやってくる、遅刻の常連2号。

「ほらっ。また遅れる。・・・走れ!!」

智紀は幸の手を取り走り出した。

第1話毎朝（後書き）

初投稿で、いびつなところが多々ありますが今後ともよろしく願
いいたします！！

第2話涙の意味

9月。秋です。私、曾根幸（そねさち）は、文化祭のプロジェクトリーダーです。毎日、5、6時間目は文化祭準備です。．．．．．
．．．．．確かに、やりがいはあるんです。やってて、“ああ、私が作ってる”って感じするんです。でも、なんだか違う気がして．．．．．あ、チャイム鳴り出しました。はあ。とりあえず、今日も終わりです。疲れた。

幸は、重い足取りで教室へ戻った。．．．やっている人は楽しいのかも知れない。自分の権利ばかり要求して、楽しい事をわいわいやってれば良いんだから。でも、私は何なのだろう。他人が要求してきたことまで断って、いいものを作り上げようとする私は間違いないのだろうか．．．。幸の胸の中はそんな事で一杯だった。．．．何故か、涙が出た。私は間違っていないと思ってるのに。正しい事をやっているつもりなのに。．．．どうして自分のことしか考えられないの？自分たちがわいわい楽しくやっている裏で、誰かが傷ついてるんじゃないの？どうして、気がつかないの？．．．．．と、最後に自分のこと考えてしまう自分が幸は恨めしくなった。

ダイジョウブ？ドウシタノ？ナニカアッタ？ツカレテナイ？．．．
．．．そんな漠然としたコトバなんていらぬ。聞きたくも無い。私に話しかけないで．．．．．。幸はただ、泣くしかなかった。変な同情なんてしてほしくなかった。本気で自分のことだけを考えてコトバを放ってくれる人がほしかった。．．．．ふわっと背中に広がる暖かさ。小さい割りにずしっとくる優しい重さ。智紀（ともり）が背中合わせに寄りかかってきた。

「．．．．．ばか．．．．．」
「．．．．．あほ．．．．．」
「．．．．．」

「・・・・・・・・死ね・・・・・・・・」

・・・・・・・・

「・・・・・・・・どうした・・・・・・・・？」

智紀はそれだけを聞くと、ひっきりなしにしゃくりあげる幸の手を引き、水のみ場へ行った。

ただ泣き続けるだけの幸の横に立っているだけだったが、その無言の優しさが嬉しかった。思い起こせば、ずっと昔から智紀に幸は助けられてきた。幼稚園で、人気のあった智紀と毎朝登園したり、お弁当を食べたりしていてクラスの女子全員を敵に回したときも守ってくれた。小学校に上がってからも、やっぱり人気のある智紀と登校したりするだけで学年の女子からいじめられた。そのときも守ってくれた。・・・何度も何度も。いつもいつも。一番近くにおいて助けてくれたのは智紀だった。

「・・・・・・・・落ち着いた？」

心に落ちてくる、優しい声。

「・・・・・・・・疲れたんだろ？」

落ちてはしみ込む、温かい音。自然に解ける心の不安。辛苦。

「ありがと。・・・また、助けられちゃった・・・・。いつも迷惑かけてゴメンね」

いつもは出ないのに、何故か素直に出た言葉。いえなかったこのコトバ。・・・・・・・・・・・・・ありが

とう・・・・・・・・

「今日は素直なんだな・・・・。いつも強がるくせに」

「べ、別に強がってる訳じゃ・・・・・・・・」

「甘えて良いんだぞ？つらかったら言って。ね」

私より少し小さな体で抱きしめる智紀。その腕は小さく震えていた。

「あ、え・・・・。どうしたの？もしかして、泣いてるの？」

智紀は熱い息を吐くと、フルフル首を振りパツと離れた。

「泣く分けないだろ。ばーか。教室戻るぞ」

とにへらつと笑った。

第3話 二つの心

月日が経つのは早く、気がつくともう文化祭前日。最終準備に追われ続けている幸。自分の仕事をこなしていきながら驚異的な統率力でプロジェクトメンバー全員に的確な指示を飛ばしていた。・・・

「つくあーーーーー！終わったああ！！」

文化祭の準備も終わり、幸は大きく伸びをして目を閉じた。・・・長かったこの2ヶ月。あつという間に過ぎたわ。色々な事、あつたわね。あ、そう言えば、智に助けられたなあ・・・あの時、智いつもより優しくかった。何でだろう・・・なんか時々優しくなるのよね。しかも気持ち悪いくらいに。だって、この前なんて抱きしめられたわよね。あ、ずっと前なんかおでこにチューされたんだっけ・・・

ふと目をあけると、ドアップで智紀の顔。

「っひい。っ智。いつから覗いてたの？」

智紀は幸の横に座ると、ニツと笑いながら幸の手を取り、

「目つぶったときから」

と言った。幸はにこにこほくほくしている智紀を見て、フツと苦笑した。今ままで何度この笑顔に癒されてきた事だろう。でも、笑顔だけじゃ足りなかった。つんつんと智紀の柔らかい頬を触った。

「いやああ・・・癒し。超気持ちいい」

と言っていると、智紀はすくつと立ち上がり、

「触るなよ。・・・気安く・・・」

とボソツと言った。幸は聞き取れず、聞き返したが別に、とあしらわれた。智紀は、

「あ、そうだ。文化祭、一緒に回らない？」

と聞いた。幸は、

「うん。当たり前でしょ。私、智と一緒にじゃないと迷子になっちゃ

「もん」

と言った。智紀は、複雑な胸中を押さえ込みながら、
「バカだな。ほんと。……じゃあ、また明日な」
と言って部活に向かった。

幸は一連の智紀の若干不自然な行動を見て、どうしたんだろう。
と思ったが、最後のいつもの口調に一安心した。

第4話般若軍

がやがやと混み合う校舎。人ばかりであふれ、今にもはちきれそうな教室。そう。いよいよやってきた文化祭当日です。私のチームは、戦争について考える、です。生徒よりは、お年より受けしています。誰に受けようと、見てもらえると嬉しいです。

幸は自由時間を迎えると、教室の前で智紀を待った。・・・・・・遅い。いつもは時間にルーズではないのに。

「智、どうしたんだろう・・・・・・」

そのときである。階段から女子の悲鳴が大量の足音とともに聞こえてきたのは。

「ん・・・・。何？」

ふと、視線を向けたその先には、劇で王子様の服を着た智紀が女子に取り囲まれていた。きゃーという鋭い悲鳴や、なっている人。最悪、失神してしまいそうな人までいた。

「うわ。すご・・・・・・」

幸は傍観者の振りをして、おうおう、と眺めていた。智紀はその良く知る傍観者の視線に気がつき、すまなさそうな顔をしたが、その傍観者は、よつ、と手をあげた。智紀は助けてはくれない事を悟り、自力での脱出を試み始めた。おもむろに、穿いていた白い手袋を取ると、思いつき遠くに投げた。女子の山は、面白いぐらいそっちへ走った。自力での脱出に成功した智紀はいそいそと幸のところへ行った。

「ごめん。幸。まさかこんな事になるとは・・・・・・」
と言った。が当の本人は、

「やあやあ人気者。君もさぞ、大変だろうねえ」

とまるで他人事のように言った。そして、智紀の手をとると、

「王子様はお姫様をエスコートしなくちゃいけないのよ？」

と言った。智紀は、ふっと息をつくと幸の手をきゅっと握り、

「わかってるよ。俺のお姫様……」

と言った。幸はきょとんとしながら、

「あ、え。俺のお姫様とか。何言っちゃてるの。そ、そんな事言われたら……」

と言い詰まった。智紀は幸をまじめな顔で見つめ、

「そんな事言われたら、何？」

と、聞いた。幸は頬を赤くしながら、目を泳がせ、

「智が私のこと好きなのかと……思うじゃない……」

と言った。智紀はまじめな顔で見つめたままだった。

「……幸……俺……」

と何かを言いかけた瞬間、

「いたわ!! あそこよ!!」

と先ほどの女子の山が般若のような形相で追いかけてきた。智紀は、がつくり肩を落とすと、

「走るぞ!!」

と智紀は幸の手を掴み走り出した。

第5話 こっくり人形

智紀と過ごす時間は楽しくて。どんどん時間が過ぎていった。文化祭も、とうとうファイナーレを迎え、最高潮に盛り上がっていた。最後のプログラムである、生徒会役員によるエンディング。今年のテーマは いのち

とても重いテーマに生徒会役員は果敢に挑み、見事に成功させた。満員の体育館は拍手に包まれた。生徒会役員は惜しめない全校生徒、教職員、保護者からの拍手にステージ上で涙した。

興奮冷めやらぬ幸は智紀と家へ向かって歩いていった。

「最後、生徒会エンディング。超感動したあ！！ねえ、智紀？」

幸はルンルン弾みながら智紀に聞いた。智紀は無言でうなずいた。

幸は一人でペチャクチャペチャクチャ話していた。智紀は何かを考えているのか、無言でうんうんとうなずいていた。聞いているのか、いないのか、それさえもわからなかった。

「……………でね……………。智紀聞してる？」

こっくり。

「智紀ばか？」

こっくり。

「智紀聞いてないでしょ？」

こっくり。

「どっちよ、智紀」

こっくり。智紀はこっくりこっくりうなずくだけだった。幸ははあっと大きなため息をつき、

「智紀っ！！！！」

と叫んだ。

「うわっ……………。何だよ、いきなり」

智紀はきんきんしている耳を押さえた。

「……………どうしたの？智紀……………。何考えてるの？」

智紀は見つめる幸の視線から逃げるように一歩前に出た。幸は、智紀の手首をつかみ、引き止めた。智紀は何も言わず立ち止まった。・

「あっ、あのさあ、さっきなんか言おうとしてたしよ？何て言おうとしたの？」

幸は智紀の前に立ち聞いた。智紀はしばらく押し黙った後、

「俺は、俺はっ・・・」

とだけ言い、また押し黙った。幸はムムムと眉を寄せ、

「俺は何？」

と聞いた。智紀はまたしてもこっくりうなずいた。

「もう！！こっくり人形じゃわかんないよ！！」

幸は智紀の腕を揺さぶった。智紀は幸の手を払い、

「俺はこっくり人形じゃない」

とぽつつり言った。幸は苦笑しながら、

「そんな事わかってるわよ。例えよ？」

と言った。智紀は、かすかに震え、

「俺はっ、俺はお前のことがっ・・・・・・・・好きなのにっ」

と言い放ち走り去った。

「智紀！！ちよっ・・・・・・・・。どういう意味よ・・・・・・・・」

幸は一人取り残され、たった一言“好きなのに”の深い意味にさいなまれていた。

好きなのに。 たった一言の意味はひどく重く・・・・・・・・

第6話 柚子

一体あれはなんだったのか。どういう意味だったのだろう。意味は無いのだろうか。

好きなのに

言葉の意味は重く。

幸はあの後から、遅刻組みの卒業をしていた。いつもの様に学校へ行って、智紀に会うのが怖かった。どういう顔をして話せばいいのか。むしろ、話さないほうがいいのではないのか。

「あああああ！！もう！！どうすればいいの？！」

幸は授業中しかも、テスト中に突然叫んだ。周囲の冷たい視線が痛く、肩をすくめながらいそいそとテストへ集中した。

考えれば考えるほどわからなくなっていった。言葉の意味も、智紀のことも、自分のことも。二人の関係は永遠にあのままだと思っていた幸は、あの言葉がなんなのか。幸はあんな一言で今まで積み重ねてきたものが、壊れるとは思ってもみなかった。

「どうしたの？何か考えて」

一人ぼつぽつ歩いている幸に声をかけたのは、大親友の曽根山柚木（そねやまゆき）。中学生とは思えないくらい、艶っぽく色気のある女性だ。幸は、柚木に抱きつき、これまでの事を話した。柚木は幸の頭をよしよしと撫でた。柚木は、頭を傾け考えると、

「どういう意味が確かめたの？・・・確かめてないのに、一方的に避けるのはどうかと思うわ。彼だって、その発言の釈明をしたいと思ってるかもしれないし。・・・だから、一度しっかり話して御覧なさい？」

と言った。幸はこくんとうなずき、

「話してみる……けど、どうやって……」

と言った。最近、智紀とは全然話していないし、顔を合わせてもない。きっかけが何も無いのだ。柚木はふうつと息をつくと、

「しょうがないわね。最近話してないから、きっかけ無いんでしょう。違う?」

と幸に問いかけた。何故、こんな事までわかってしまうのか。幸は感心しながらうなずいた。

「よし、ここは私が一肌脱ぐか」

柚木は一言そう言い、私服のように見える着崩した制服を直し、歩いていった。

カリカリと言うシャーペンシルの音が教室に響いていた。智紀は一人シャカシャカペンを走らせていた。

「……智紀?何してるの?」

柚木はゆっくり智紀の前に座り、たずねた。智紀は書いていた紙をさりげなく隠し、

「別に………。何しに来たの?」

と柚木に質問した。柚木はカシャン、と智紀のシャープペンシルを落とした。智紀は、いいよ、とシャープペンシルを拾うために、かがんだ。柚木は、ゴメンネ、と言いながら、さり気なく机の上から紙を一枚、抜き取った。すばやく文章に目を走らせると、柚木は、ふつと息をつき、元の場所に戻した。

「ごめんね。落として。……ちよつと、用事思い出したわ。バイバイ」

「ん?ああ。じゃーな」

柚木は煙のように教室から出ると、クスツと笑った。

いつもの笑い

柚木はまるで煙のように幸の家へ向かった。オートロック式の一般的なマンションのインターホンの番号を何箇所か叩いた。すると、

「柚木？あけるから。あがってきて」

と声が出てきた。柚木は、はいはいと言うとエレベーターに乗り込み、7の数字を押した。

幸に部屋へ通されるといつもの様にいすに座った。幸はあらかじめ用意しておいたグラスにオレンジジュースを注ぐと、柚木に差し出した。柚木の前に座ると、

「で、どうだった？」

と唐突に聞いた。柚木はくすくす笑うと、

「…大丈夫じゃない？うん。そのうち、いい結果が出るでしょう」と占い師のように言った。思いもよらぬ答えに幸は肩から力が抜けるのがわかった。

「そんなこと、聞かなくてもわかってるんじゃないの？智がどう思ってるのか。一番知ってるのは幸だと思うよ。違う？智が一番長い時間一緒にいて、笑ったり、泣いたり…。いっつも、一緒だったのは幸でしょ？」

柚木は涙をこぼす幸の手を取り続けた。

「何をそんなに構えてたの？肩の力、抜いたら？自分の気持ち大切にしないと。ね。確かに、わたしが同じ立場だとしたら、元の関係を壊すのは怖い。だって、それだけ時間かけてきたんだから、次の日からまた修復できるとはおもわないし。でも、智も、幸も、構えすぎなの。ちよっとのリスクくらい気にしないで、素直に自分を表現したら？ね？」

穏やかな沈黙の後、幸は立ち上がった。

「わたし、がんばってみる。…ありがとう。柚木」
と言に残し、走って出て行った。

「どういたしまして」

柚木はくすり、と窓の外を眺めた。

舗道に落ちる影が長くなってきた頃、幸は下校中の智紀を見つけた。

「智紀！！」

自分でも驚くくらい大きな声が出た時、智紀も振り向いた。

「幸……」

幸は上下する肩を落ち着かせながら、智紀の前に立った。

「あのね、智紀……。私、今までずっと智紀が横にいて、当たり前だと思ってた。でも、智紀はみんなから好かれるのに、ずっと、私の側にいてくれるから、智紀に鈍感になってた。だから、今までの私たちの関係を壊したくなかったの。だから、気にしないようにしても、気にしちゃって、だけど、智紀は相変わらずで、でも、私気づいたの。智紀のこと……！？」

「好きだ。幸のことが。幼馴染だからいつも一緒にいたんじゃない。……最初はそうだったのかもしれないけど、いつからか、幸を離れたくなかったんだ。いつでも、幸の隣りにいたくなって、でも、幸は相変わらずだから。言うに言えなかった。だから、もう一回、言っとく。幸、好きだよ」

智紀は幸を優しく抱きしめた。幸は溢れてくる涙を止めることができず、智紀の腕の中で泣いた。

「私も、智紀のこと、好きだよ」

赤々と燃える夕陽のもと、幸の心もたつぷりと満たされていった。

「じゃあ、これもいらないな」

智紀はポケットから封筒を取り出した。幸が封筒を手にとると、
「最初で最後のラブレター」

と言って、にへらつと笑った。

いつもの笑い（後書き）

だらだらと本当に遅筆でした。最後までお付き合いいただき有難う御座いました。これからも、明星院麗子を宜しくおねがいいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8551c/>

君の手

2010年10月9日02時00分発行